

平成29年度 U R ひと・まち・くらしシンポジウム

U R 技術・研究報告会

特別プログラム 概要版

「団地とひとから考える、まちへの仕掛け」

【モデレーター】

東京大学大学院 工学系研究科建築学専攻 教授 松村 秀一 氏

【パネリスト】

株式会社 ブルースタジオ 専務取締役役

大島 芳彦 氏

株式会社 studio-L

東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科 講師

出野 紀子 氏



平成29年10月11日 (水)

日経ホール

「団地とひとから考える、まちへの仕掛け」の背景【松村氏】

団地と人とまちをどうつないでいくかということですが、U Rに限らず日本中に多くの団地がある中で、これから、それぞれのまちをどうしていくかという時にも、団地をどうするかというのは非常に大事な資源として活用できる可能性があり、一方で、これから、どういう人がそこで何をしていくかという観点も非常に重要になって来ます。

団地が本格化してきた時代（昭和36年）に撮られた映画「駅前団地」で、団地の背景を説明したいと思います。この映画は、農地だったところに団地ができていき、新たな住民が地域へ入ってくることに對するわくわく感や、開発への期待感などが描かれています。団地はそうのように始まってきたのです。五、六十年前から団地が建設され、新駅ができて、そこに新住民がどんどん入ってきて地域社会が大きく変わってきました。そして、時代を経て、圧倒的に住宅の数の方が世帯の数を上回り、急速に団地を整備するとか、団地を建て替えるとか、駅前を再開発するとか、あまり必要のない時代になりました。その中で、人の生き方が非常に多様になって来た中、それぞれの生き方を実現していく上でどうやってストックをうまく利用していくかという時代に入ってきています。だからこそ、リノベーションとか、ストックを活用してエリアマネジメント、あるいはまちづくりすることに強い意味が出てきています。団地というものが周りを含めたまちの中心的存在になり得るポテンシャルを持っているということに注目して、今後のことを考えていく必要があると捉えています。



「まちぐるみでの資源の活用」【大島 氏】

空き家というのは問題ではなくて、これは日本が抱えている膨大な空間資源である、そういう認識を持っています。

不動産の価値はそもそも所有権を主張する敷地や占有部分に価値はなく、エリアに価値があり、不動産の価値はそもそも人である、そういう見方をしていく時代になったと考えています。建物、不動産の価値、再生を考える時に、ハードウェアではなくて、関係性、地域ということを第一義として考えることが必須であると、私どもは認識をしています。かつての日本の社会は、家というのが共にというコモン、パブリックの領域に属するものであり、決してプライベートではありませんでした。今は知らない間に境界が明らかな状況になり、この状況は豊かさの一つの象徴となりました。しかしその豊かさが、福祉などで弊害となっているのではないかと感じています。こういった失われたコモン、パブリックを取り戻そうということが私たちの日々考えている仕事の根底にあるマインドです。

日常そのものが持つ可能性に誇りをもち、日常で価値がないと考えていることについて、もう一度価値を見いだして、独自性に立ち返らせようと考えています。今の時代、付加価値という時代では無くなったと考えます。その消費されてしまっていた価値を見いだすということも非常に大事なスタンスと考えています。それを見立てるという手法で、団地を再生しようではないかと言うことです。

リノベーションのまちづくりの現場においては、当たり前の世界、物を見つけて、見立てて、伝える、この伝える部分から



共感の連鎖が広まっていくと考えています。私たちのまちづくりというのは平易なものでなければならないというふうに思っています。たばこ屋のおばあちゃんも「東京から来たばかな建築屋がこんなことを言っていたよ。おもしろかったんだよ」と、次の日におばあちゃん仲間に話をしてくれるぐらいの物の見方が必要だと。共感の連鎖によって、まちは力強く成長を始めるというふうに考えます。自分たちのビジョン、あるいは見立て方を指し示し、共感を得た上でみんなで考えようという状況が理想かと思います。

団地のこれからの可能性についてですが、団地の問題は建築の問題ではなくて、まち再生であると捉えています。決して、選ばれる部屋ではなく、選ばれるまちというものを考えなければならないと思っています。ベッドタウンという幻想を捨て単機能で画一的なベッドタウンから、ユニバーサルな機能を持つ、選ばれる郊外を目指すということです。例えば、田んぼがあったり、木登りできたりとか、団地は非常に魅力的な生活環境だったりします。「ホシノタニ団地」（神奈川県座間市）という団地のリノベーションを手掛けたのですが、駅前立地にある小田急の旧社宅の団地で、子育てに関連した広場や施設、菜園やカフェを仕掛け、新しい住民だけでなく地域住民も入ってきて、交流の場が生まれました。子供を育てるということは地域に対する密着、愛着につながりますので、育っていくと、今度は背後の宅地に住み替えていくという連鎖が生まれるということを期待してまいります。

豊島区椎名町の商店街の店舗リノベーションの事例では、高齢化した商店街だったのですが、みなさんお元気で、近くに神社があったり、お祭りがあったり、お風呂屋さんがあったりして、実は外国人なんかにとっては、日本人のディープな日常生活を味わえる絶好の場所ということが分かりました。「布」というものが世界の人にとっての共通言語ということもあり、布をテーマとしたミシンカフェを仕掛けました。ここには子どもから高齢者まで、色々な人が集まり、また、布があることによってコミュニケーションが取れるという考え方を外国との接点にしようじゃないかということで。市民参加型で200人ぐらいの方が参加しました。始めは大抵怪訝な顔をされますが、根気よくやっていると、最終的にはおじいちゃん、おばあちゃんたちが差し入れまで持ってきてくれるようになりました。やはり物づくりを通じて人が繋がるということが分かりました。お年寄りたちは外国人が来ることによって、英語なんかしゃべれないんだけど、一生懸命日本語で色々コミュニケーションを取ろうとして、差し入れは持ってくる、バイタリティのある方になっていっています。こういったことを通じて、リノベーションとは言え、色々な福祉の解決策にも繋がるのではないかと最近思っており、まちぐるみでその資源を使いこなしていくということが団地再生、地域再生のポイントと思っています。

「2240歳スタイル -時間を味方にする人生の先輩たち-」【出野 氏】

コミュニティデザインの仕事は、デザインの力を使ってコミュニティの力を高めていくということであり、課題解決をしていくという力、人と人を繋げていくような力、持っている力を引き出すというのが仕事です。

秋田市の依頼で、元気ですが、少し助けが必要な高齢者を支えていくというような仕組みをつくれないかという仕事をしましたが、大島さんがおっしゃっていた「見立てる」に近い仕事です。高齢者という人たちがどんな人か分からないので、彼らの生活を調査して、その調査した結果を展覧会にして、年をとることはどういうことかというのを秋田市の人に知ってもらい、考えてもらうことがこのプロジェクトの目的でした。名前を「2240歳スタイル」として、副題を「時間を味方にする人生の先輩たち」というものにしています。「高齢者」という人たちが、「人生の先輩」というふうに読み替えて、呼び名を変え、先輩たちは今、どんなふうに暮らしているのか、これまでどうやって暮らしてきたのか、これからどうしたいの



展覧会を市民と盛り上げる



展覧会のPRを考えるチーム



見るだけじゃなくしくみを考えるチーム



おみやげを考えるチーム



お慰め文庫からしきと笑礼

かを教えてもらいました。教えてもらって、調査した内容を展覧会にするに当たっては、秋田市民の方と共有するために、住民参加型で展覧会をつくりました。

展覧会は12日間、秋田県立美術館の1階を借りて、おじいちゃん、おばあちゃんたちの生活を展示しました。目的は人生の先輩というのは誰なのかということを知る。それから来た人が自分の家族や、近所に住んでいる先輩のことを、あの人、どうしているかなとか、じいちゃん、どうしているかなと思う。高齢者は支えられる存在ではなくて、支えることができる存在だと思ってもらうというのが狙いでした。先輩たちはとてもとても警戒心が強く、信用してもらえないと本音が引き出せないで、何度も何度も訪ねました。展覧会では衣食住と彼らのライフスタイル、あと元気の秘密というのを展示しました。食事についても、色々調べて展示会で示しました。何が彼らを元気にしているのかみたいなものも色々見て、彼らの物語、それこそ人生の物語を大きな展示のパネルにして見せました。

展覧会は市民の皆さんと一緒に考え、どうやったら、これにいっぱい足を運んでくれるようになるか、色々テーマを考えて、皆さんでチームになって展覧会を盛り上げてくれました。最終的には10日間で1,646人の来場があり、リピーターがとてもとても多く、若い世代には色々なものが新鮮に映り、中堅の世代には共感され、自分もああなるなど。先輩世代にとっては、私も頑張らなければという励みになるというおもしろい展覧会でした。

先輩の人生を調査して、年の差のある友達を持っているということが健康に、楽しく、その地域で長く暮らすためにとても重要ということがわかったので、次の年からは年の差のある友達をつくる方法というのを市民参加で考えています。秋田で長く、楽しく暮らすためには1人につき3人の年の差フレンズをつくろうと。できれば、20歳以上の年齢差を持つ友達をつくろうということで今進めています。

いざと言う時に助け合える関係というのは日ごろから仲良くないとできないので、日ごろからどうしたら仲良くできるのかという事を考えるのが年の差フレンズのあり方です。もしも自分に、毎日じゃなくても会いに来ておしゃべりしたり一緒にご飯食べたりする友達が地域にいたら、万一自分に何かあれば訪ねてきてくれたり、助けてくれたりするでしょう。施設に入れば自分が持っているそういう資源が絶たれることになります。そうなるまでに、関係性を築いて、いざ何かあれば自分のところへ誰かが来てくれるという状態をつくるには、年の差のある友達をもつことから始めるのがいいと思って取り組んでいます。

「秋田の事例のこれからの展開について」

松村) 自治体という大きな単位の中で共通的にやっていこうねということのようですが、そこからの展開というのはどんな感じになる可能性を持っているのかお聞きします。

出野) まずはテーマ型のコミュニティ、今こういうものに関心があるというコミュニティの人たち同士で方法を編み出した上で、自分たちが自分の地域に帰った時にそれを展開していくというのを考えています。その時の空間の範囲というのは歩ける範囲にしたいなと思っています。やはり年が上の方になってくると遠くへ行けなくなるので、そっちに合わせて、徒歩圏内くらい、だから町内会くらいのサイズで一人一人が始めるようなことを今考えています。

「ホシノタニ団地の事例について」

松村) 周りから来る人というのは大体どれぐらいのエリアから来られている感じなのかお聞きします。

大島) 入居者の方は世田谷方面から移住してきた人が多く、そもそも座間で家探しをしていなかった人が6割くらい住まわれています。団地内の公園的な環境、菜園、それから子育て支援施設に來ている人たちというのは



圧倒的に地域の方が多いです。それはある意味意図してその接点をつくろうとしているので、団地の住人のためとは決して言っていません。あとは、駅前のポテンシャルを使えるところは全部あぶり出してやろうと考えていました。

「人間関係の作り方について」

松村) 人間関係のつくり方とか、きっかけのつくり方とか、あるいはそれを継続させる仕組みとか、その辺、どんな感じをお持ちですか。

大島) 直面している問題は高齢化ですが、そこにダイレクトに対策を考えようとすると、やはり誤ります。これは対処療法でしかなく、決してそこに心を動かされない。子供たちの社会参画を促すような仕組みを考えてあげると、それをサポートしてやろうとする高齢者の方、先輩たちがいる、そういう外堀から埋めていくようなことは大事ななと思っています。ホシノタニ団地は子供たちのための駅前広場と言いましたが、結果的に子供たちがいることによって安全な環境ができて、その安全な環境は高齢者の方にとってもやはり安全な環境だし、子供がいれば笑顔になります。外国人の話も同様で、子供や外国人というのは結果的に意外と高齢者の方の社会参画を促している結果になっているなと思いました。

出野) 私も本当にその通りだと思います。あの展覧会は、最終的に秋田市の地域福祉をつくるためのきっかけです。先輩たちの暮らしをそのまま、面白い展示にしたわけですが、何か楽しそうだなと思って入ってきてくれるというのがあります。人は、楽しいことだと動き出すと思いますが、その楽しさが共通した時に、「やっぱり、あなたも一緒なんだな」という共感が生まれたのかと思います。

松村) 問題ははっきりしているわけではないし、この人たちがどう幸せに暮らしていくかということが問題であって、そうすると、どのように他の人に興味を持ってもらったり、おもしろがってもらったり、認め合ったりする環境みたいなものをつくっていくかというが、非常に重要だと思いました。

大島) 展覧会にしたというのがとてもセンセーショナルで、生活者である先輩たちは自分たちの生活がみんなおもしろいと思ってもらえることに気づいたり、誇りを持てたということが、きっかけとしてはとても良かったはずです。

出野) 本当にその通りで、展示会に出ている人たちは一般の人で、やはり人に見てもらおうということで、価値観を自分で再確認するようなこともあって、高齢化とか、少子化と言われた瞬間にマイナスだったことが、何か楽しみになってきたという感想がとても多く、想像以上でした。

大島) プライドをもう一度見いだすようなことが、どんなきっかけにしても良いなと思いました。椎名町で子供のためのリノベーションスクール行った際、商店街をまち歩きして、子供を連れて入っていくと、高齢者の方々はもう目をキラキラ輝かせて、「傘屋さんというのは、昔はおばあちゃんの反物みたいなものを張り直す時に傘の生地にして日傘なんかをつくったんだよ」とか、僕なんかが行って「どうですか」と聞くと憎まれ口しか言わないのに、小学生たちに対してはいま超現役のバリバリの目つきで、どうだと言って、ニコニコなんです。子供たちが積極的に顔を出すだけで十分効果があると思いました。

出野) 本当にどんな人にも、どんなことにも、何かきっかけになることとか、自分にとって、あって良かったみたいなものはいっぱいありますから、それが何かというのを本当に探し続けるというのは重要かと思います。

「継続性について」

松村) 仕掛けたものを継続させていく、これはとても難しいことです。良かれと思ってやっても、それを継続していけないと意味が発揮できない。どんなふうに継続性をお考えでしょうか。

大島) ホシノタニ団地の話になりますが、団地だけのお祭に絶対しない。出店者は広域に捉えた、その地域のベテラン、要は生活のベテランの方たちに出店してもらう。だから、団地の住人に限らず、地域のエンターテナーみたいな人に集まって貰います。来る人たちに一生懸命に魅力を語る語り部たちになってもらいます。その言葉

を雄弁に語ってくれるのは、その地域のベテランたちだからということにしていて、それに共感した人たちがそれを継いでいきます。平易な言葉で、わかりやすく何が魅力なのかということを整理しようということをしていて、プロとしてやらなければいけないことはそれだと思っています。

出野) 伝えるのではなくて、伝わるかどうかというのがとても重要だと思います。継続性は最初からいつも考えています。プロジェクトに関わった人が自分の言葉でしゃべっていく。そこがとても重要な成長ポイントで、こちらも意図していないものがいっぱいありますが、それが良いと思っています。

それから、大変だなと思ったらやめた方が良いですよと言っています。やはり楽しくないと続かないので、やらなきゃという気持ちでは辛くなると思います。絶対やるのだということではなく、楽しく続けるにはどうしたら良いかというのをいつも考えましようと言っています。

「団地とひとから考える、まちへの仕掛け」のまとめ【松村氏】

団地、人、まちというテーマでお話して来ましたが、大島さん、出野さんがやられていることは、聞いてみないとわからない、経験の積み重ねで出来ることです。URは多くの団地を経営されていますので、まちや人に働きかけるポテンシャルの大きさはものすごい。

問題だと思うと、問題が大き過ぎて、どうするのかということになるけれども、問題というより、むしろ楽しいとか、資源であるとか、あるいは楽しい生き方が追求できる場面がいろんな形であると捉えると、もっと前向きな、日本の大きな資源になっていくのではないかと思います。